

池大雅一書の世界

おてもと ガイド

出品作品の白文と解説です。
ガイドをおてもとに、まずは文字の大きさ、形や筆の勢いを直にお楽しみいただけますと幸いです。

- ・取り消し線の文字は、脱字を意味する。
 - ・適宜改行し、句読点を補った。
 - ・前後の詩句が欠けている場合、灰色の文字で補った。但し字数の制約から、唐詩帖については詩句の全てを示すものではない。
 - ・解説は小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、二〇〇五）、川合康三編訳『新編中国名詩選』（岩波書店、二〇一五年第一刷発行）を参考にした。
- 制作：京都文化博物館

書簡「庄右エ門宛」

貴墨忝く拜見、御平安奉大慶候、のうれん廿八日晚取二可被遣候、御心安儀奉畏候

(凶)

如此したため候哉、左候ば宜、もし相違二御座候ば明寅ノ一こく迄二御申しこし可被下候

秋平

庄右エ門様 奉復

【書き下し文】

貴墨忝く拜見、御平安大慶奉り候、のうれん（暖簾）二十八日晚取りに遣わさるべく候、御心安ぎ儀畏れ奉り候。

(凶)

此の如くしたため候や、左候ば宜しく、もし相違に御座候ば明寅の「一こく迄」に御申し越し下さるべく候。

水 燕 心 京 競
雲 在 寛 凈 遅

杲堂之偈

七歳神童書大張、筆長身短妙相當、幼齡愛爾能如此、可比禹偁曾作章。黄檗支那杲堂老僧書示

池野氏又次郎童子

【解説】
七歳のとき、黄檗山萬福寺で大書を披露して賞賛されたことはよく知られている。中国宋代の文人、王禹偁（九五四―一〇〇一）が幼いころから文才を発揮したことを引き合いに出して、「可比」と述べる。

メモとしてお使い下さい

獨樂園記

迂叟平日讀書、上師聖人、下友群賢、窺仁義之原、探禮樂之緒、自未始有形之前、暨四達無窮之外、事物之理、舉集目前、可者舉之、未至夫可何求於人、何待於外哉、志倦體疲、則投竿取魚、執衽采藥、決渠灌華、操斧剖竹、濯熱盪水、臨高縱目、逍遙徜徉惟意所適、明月時至、清風自來、行無所牽、止無所梃、耳目肺腸、卷為己有、踽々焉、洋々焉、不知天壤之間、復有何樂、可以代此也、因合而命之曰獨樂。

【解説】
作者は司馬光（二〇一九―一〇八六）。『資治通鑑』の編者として名高い。北宋時代に官吏として活躍したが、王安石（二〇二一―一〇八六）の新法に反対して中央から離れ、一時洛陽において隱棲した。そのとき作った庭園が「獨樂園」である。「獨樂園記」は熙寧四年（二〇七二）造成した庭園の様子から書きおこして理想的な生活を謳いあげ、さらにこの生活をともに楽しめる人がいれば歓迎する、と述べた長文。そのうち、読書に釣りにと気の赴くまま生活する様子を謳った箇所は、文人の憧れとして共有された。

江亭

坦腹江亭暖、
長吟野望時。
水流心不競、
雲在意俱遲。
寂寂春將晚、
欣欣物自私。
故林歸未得、
排悶強裁詩。

【解説】

杜甫（七一―七七〇）作。流寓を経て成都に居を構えたころの詩。草堂水辺のあずまやを舞台とし、前半四句ではのどかな春景と自らが一体となるかのよう。しかし大雅作品にない後半部分で実は、悶々とした気持ちを強いて排すために詩を詠んでいるという心情が明かされる。

秋興 八首之一

夔府孤城落日斜、
每依南斗望京華。
聽猿實下三聲淚、
奉使虛隨八月槎。
畫省香爐違伏枕、
山樓粉蝶隱悲笳。
請看石上藤蘿月、
已映州前蘆荻花。

【解説】

杜甫の七言律詩「秋興」は八首の連作。庇護者を失って成都を離れ、夔州（きしゅう）で迎えた初めての秋。岩上の藤蘿にかかっていた月が、もう秋草を照らしている。あつという間に秋が来たことと、官吏としての人生からすっきり離れてしまったことを重ねる。

上巳日寄樊瓘、樊宗憲、兼呈上浙東孟中丞簡

世間禊事風流處、鏡裏雲山若畫屏、今日會稽王內史、好將賓客醉蘭亭。

【解説】

「全唐詩」を見ると、唐代の詩人、鮑防（七二二―七九〇）に「上巳寄孟中丞」があり、また鮑溶（生没年不詳）に「上巳日寄樊瓘、樊宗憲、兼呈上浙東孟中丞簡」がある。二つに字句の違いはない。「蘭亭之詩」の題で紹介されてきたが、内容から鮑防・鮑溶いずれかの作と見なされる。三月三日・上巳の日に本来禊として行われた川辺の行事が、のちに風流な宴へと変化した。中でも王羲之（三〇三―三六二）が会稽山のほとり、蘭亭で開催したものが有名。このとき王羲之が酔って書いたとされる「蘭亭序」もあわせてよく知られている。

唐詩帖

白居易「答元八郎中、楊十二博士」
盡日觀魚臨澗坐、
有時隨鹿上山行。

駱賓王「帝京篇」

寶蓋雕鞍金絡馬、
蘭牕繡柱玉盤龍。

沈佺期「古意 呈補闕喬知之」

九月寒砧催木葉、
十年征戍憶遼陽。

郎士元「贈錢起秋夜宿靈台寺見寄」

月在上方諸品靜、
心持半偈萬緣空。

白居易「正月三日間行」

綠浪東西南北水、
紅欄三百九十橋。

巫峽山水圖

巫峽見巴東、
迢迢出半空。
雲藏神女館、
雨到楚王宮。
朝暮泉聲異、
寒暄樹色同。
清猿不可聽、
偏在九秋中。

【解説】

皇甫冉（こうほぜん。七一―一七六七）は唐代の詩人。『全唐詩』に『巫山峽』の題で出る詩を表す。巫山は中国・重慶市にある名山で、長江が流れる山中の一帯が巫峽。楚の宋玉（生没年不詳）による「高唐賦」序に楚王と巫山の女が夢の中で契りを交わしたというくだりがあり、その一節をふまえた詩。

与葛子琴詩

葛醫伯篆刻妙絕。僕秘藏一顆。時寒烈因有此寄。掃起凍毫情轉癡、鮮紅墮着更奇々。欲勞君手如冰石、為許家方試不龜。

壬午十二月 池無名

【解説】

葛医伯（葛子琴。一七三九―一七八四）の篆刻を妙絶と褒めて僕（大雅）も一顆を秘蔵していると言う。時に寒烈、それに寄せて自作の七言絶句を記す。

書簡 井上泰山宛

御鏡 一重
白銀 一封
嘉鮮 五尾
右為
御祝儀二贈下
忝拜受仕候 頓首
閏廿三日 秋平
井上先生
参人々御中

【解説】

井上先生は、大雅と親交のあった井上泰山である。風邪薬の看板「家方」（出品番号18参照）を用いていた薬屋、あか万を営んでいた。口上のはじめにある御鏡は、「重」を一単位としてのことから鏡餅のことと考えられる。

【解説】

右に掲げた五つの詩句が連続して貼り継がれている。奥書からはもともと三面の額装だったものを表装し直した旨が明らかとなるものの、詩句の並び方に法則はなく、また不自然な長い形式であったことが想定されてよいだろう。大雅による手本の一種か。白居易（七七一―八四六）の二詩はいずれも『全唐詩』に掲載。駱賓王（六四〇？―六八四？）は一時長安の都で仕官したが、のちに左遷。「帝京篇」の中で長安のきらびやかな様子を示した詩句である。

沈佺期（六五六？―七一六？）は初唐の詩人。九月、冬支度のために衣類を叩ききぬたの音は、まるで木の葉が散るのを催促しているかのようだ、という詩句の一部のみ記す。

郎士元（七二七―七八〇？）の詩句は、銭起（七一〇？―七八〇？）が靈台寺に宿泊していた際、送られてきた手紙に返信したもの。